

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主論文の要旨

論文題目 へき地医療における診療所看護師のコアとなる

活動の検討

氏名 立石 愛美

論文内容の要旨

1. 緒言

世界保健機関によると、世界人口の半数はへき地で暮らしており、医師の24%、看護師の38%がへき地で働いている。へき地の保健医療従事者の不均衡や不足は世界中で報告されており、高所得国でも同様の報告がある。保健医療従事者の深刻な不足により、推定10億人が必要な医療サービスにアクセスできていないと言われている。へき地で働く保健医療従事者のための教育やトレーニング、支援がへき地医療における人材を補充し、地域住民への医療アクセスを改善すると言われているが、へき地医療が抱える課題を完全に解決した国はこれまでにない。

日本のへき地医療の現場でも、看護職員の慢性的な不足および保健医療従事者の高齢化が報告されている。この現状を改善するために、へき地医療拠点病院が都道府県単位で設置されている。へき地医療拠点病院は、へき地診療所等への代診医等の派遣、へき地の保健医療従事者に対する研修、遠隔診療支援等が実施可能である。看護師の派遣も可能になっているが、そのような支援の前提となるへき地診療所看護師の活動の実態が不明であり、へき地医療拠点病院から看護師が派遣されてもへき地診療所での活動が困難であると報告されている。

2. 目的

へき地診療所看護師の育成を目指すために、研修や教育にて必要となるへき地診療所看護師のコアとなる活動を検討すること。

3. 研究過程

第1研究

目的：日本のへき地診療所看護師の活動とその内容を抽出すること。

方法：文献検索には、医学中央雑誌 Web 版、CiNii、Google Scholar を用いた。検索語には「へき地診療所」、「へき地」、「看護師」、「日本」を用いた。

対象論文は原著論文とし、へき地診療所看護師の活動内容を抽出した。また、抽出された活動について、へき地診療所看護師の活動項目と内容を検討するため10年以上のへき地診療所勤務経験のある7名の看護師にヒアリング調査を行った。その後、活動の項目と内容を臨床看護に精通した専門家と分析し、類似性に基づいてカテゴリー化した。

結果：へき地診療所看護師の活動は、以下の4カテゴリー『看護基礎実践(10項目)』、『地域理解(4項目)』、『管理と運営』(10項目)、『地域行政との連携』(10項目)からなる36項目が抽出された。

まとめ：本研究の結果、へき地診療所看護師の活動を網羅的に抽出した。これらの結果に基づき、次の段階として、へき地診療所で実際に行われている看護師の活動の実態と本来必要であると考えられる活動の重要性の認識を比較することによって、へき地診療所看護師のコアとなる活動を検討することとした。

第2研究

目的：へき地診療所看護師の活動の実施状況と看護師が認識する重要な活動を明らかにすることにより、へき地診療所看護師の活動の課題を明らかにすること。

方法：自記式質問紙を用いた量的記述的研究とした。対象者はへき地診療所に3年以上勤務する看護師とした。調査内容は、第1研究より抽出された36項目のへき地診療所の看護師の活動の実施の有無を2件法で尋ね、各看護活動の重要度を5段階のリッカート尺度にて調査した。

結果：へき地診療所1042箇所のうち研究協力同意の得られた81箇所のへき地診療所に所属する100名の看護師のうち、本研究の参加者の選定基準を満たした60名に研究を依頼した。最終的に33箇所、40部の質問紙を回収した。研究参加者は、所属診療所の所在地は北海道～九州・沖縄までの範囲であった。研究参加者の92.5%は、40歳代以上であり、へき地診療所勤務年数は、5年以上の者が90%を占めた。『看護基礎実践』や『地域理解』に関する活動は、およそ80%以上の看護師に重要度の高い活動として認識され、かつ実施されていた。『管理と運営』に関しては、5項目の活動で80%以上の看護師が実施していた。『地域行政との連携』に関しては、4項目の活動で80%以上の看護師が実施していた。

まとめ：へき地診療所における看護師の活動は基本的な看護実践にとどまらず、診療所のある地域を理解することや診療所の管理や運営、地域の行政にも関わり、数多くの多様な活動を行っていた。『管理と運営』、『地域行政との連携』に関する活動は、へき地診療所看護師にとって重要であると認識されているが実施されていない活動があった。これらの活動に関しては、へき地診療所看護師の活動の課題となることが示唆された。

第3研究

目的：へき地診療所看護師の視点からへき地診療所看護師の重要な活動についての意見を集約し、コアとなる活動を検討すること。

方法：デルファイ法を用いた量的記述的研究とした。3回の質問紙調査を行った。対象者はへき地診療所に3年以上勤務する看護師とした。調査内容は、36項目からなるへき地診療所看護師の活動の重要度を5段階のリッカート尺度にて調査した。36項目以外に実施している活動がある場合、自由記載に書いてもらうように依頼した。3回目の調査をもって抽出された活動は、デルファイ法によりコンセンサスが得られたとみなした。コンセンサスを示す同意率(大変重要/重要と回答した割合)は51%で設定した。

結果：へき地診療所 1042 箇所のうち研究協力同意の得られた 81 箇所のへき地診療所に所属する 100 名の看護師のうち、本研究の参加者の選定基準を満たした 60 名に研究を依頼した。最終的に 33 箇所、40 部の質問紙を回収した。研究参加者は、所属診療所の所在地は北海道～九州・沖縄までの範囲であった。研究参加者の 92.5%は、40 歳代以上であり、へき地診療所勤続年数は、5 年以上の者が 90%を占めた。

自由記載から得られた 3 項目を追加し、全 39 項目のへき地診療所看護師の活動のうち 33 項目で、51%以上の同意が得られた。『看護基礎実践』で 13 項目、『地域理解』で 4 項目、『管理と運営』で 9 項目、『地域行政との連携』で 7 項目であった。

同意率が 51%未満の活動は、6 項目あった。『管理と運営』の 3 項目、『地域行政との連携』の 3 項目であった。

まとめ：33 項目の活動は、へき地診療所看護師にとって重要な活動としてコンセンサスが得られた。コンセンサスの得られなかった活動に関しては、へき地医療拠点病院の意見を収集した上で、へき地診療所看護師のコアとなる活動であるか検討することにした。

第 4 研究

目的：へき地医療拠点病院の視点からへき地診療所看護師の重要な活動についての意見を集約し、コアとなる活動を検討すること。

方法：デルファイ法を用いた量的記述的研究とした。3 回の質問紙調査を行った。対象者は、へき地医療拠点病院のへき地診療所連携担当者とした。調査内容は、39 項目からなるへき地診療所看護師の活動の重要度を 5 段階のリッカート尺度にて調査した。3 回目の調査をもって抽出された活動は、デルファイ法によりコンセンサスが得られたとみなした。コンセンサスを示す同意率(大変重要/重要と回答した割合)は 51%で設定した。

結果：日本のへき地医療拠点病院 296 箇所のうち、21 箇所のへき地医療拠点病院に所属する 21 名のへき地診療所連携担当者が参加した。研究参加者は、所属診療所の所在地は北海道～九州・沖縄までの範囲であった。医師が 5 名、看護師が 15 名、事務職が 1 名であった。参加者のうち 8 名は、へき地診療所での勤務経験があった。全 39 項目のへき地診療所看護師の活動のうち 37 項目で、51%以上の同意が得られた。『看護基礎実践』で 13 項目、『地域理解』で 4 項目、『管理と運営』で 10 項目、『地域行政との連携』で 10 項目であった。同意率が 51%未満の活動は、「管理と運営」の 2 項目であった。

まとめ：37 項目の活動は、へき地医療拠点病院の連携担当者にとってへき地診療所看護師の重要な活動としてコンセンサスが得られた。へき地診療所看護師とへき地医療拠点病院の連携担当者の間において、へき地診療所看護師の重要な活動の認識に差のあった活動は 4 項目あった。それらは診療所看護師の有給休暇取得のための取組や災害時・緊急時の医療体制の整備、虐待の予防に関する活動であった。へき地診療所看護師とへき地医療拠点病院の連携担当者の双方に、へき地診療所看護師の重要な活動としてコンセンサスが得られなかった活動は『管理と運営』に関する「経営・運営管理」と「遠隔医療システムの導入と運用」の 2 項目であった。

4. 結論

本研究において、第 1 から第 4 研究の結果を踏まえ、へき地診療所看護師のコアとなる活動は『看護基礎実践』、『地域理解』、『管理と運営』、『地域行政との連携』からなる 33 項目であることが明らかになった。

コンセンサスの得られなかった活動については、本研究の結果、現時点では研修の内容

としては不必要であるが、将来、へき地医療供給体制の基盤強化等によって、へき地診療所看護師が主体となる活動になる可能性がある。引き続き、これらの活動についての詳細な検討が必要である。